エコロジー&アメニティ えこnity

〈37〉

心地よさの中味

ドイツの暮らしで感じたこと

屋良 朝乃

▲1階の道路に面する住戸。建物沿いにある小さな花壇と壁のフラワーポットの草花が道行く人を楽しませる。窓ふきは日曜日の日課
◀玄関わきの小窓は住宅のショーウインドー。レースなどで美しく飾る。住む人のセンスを表現する場であり、うかがい知る場でもある

近所付き合い

かつて、日本には長屋という集合住宅があり、八っぁん熊さんのような住人が貧しい住宅事情の中で助け合い楽しく暮らしていた。現代の集合住宅では隣近所の付き合いが少なく、死後何カ月かたった白骨化した住人が発見されたり、ピアノの音が原因で殺人事件が起きたりする。そして、「集合住宅は住みづらい。だから一戸建て住宅に住みたい」とよく聞く。

私はかつて、ドイツ・ベルリンに留学していた。下宿していたのは五階建ての古い集合住宅で、天井が高い上にエレベーターは無し、しかも部屋は最上階で、重い荷物を抱えて階段を上がるときはうんざりした。それでも大きなドアや細長い開き窓、一階には花屋が店を構えていて、なかなか気品のある古風な住まいであった。

引っ越して早々、ある夜こっぴどく同居人にしかられた。帰宅を急いで階段を駆け上がったためだ。「深夜だというのに靴音をたてて階段を上がってくるなんて非常識だ、夜中は靴を脱ぎ素足で上がるのがマナーだ！」と言うのである。

下宿を決めたときに、夜中のシャワーはなるべく使用しないように彼女から言われた。てっきり水圧が弱いのだろうと私は思っていた。ところが彼女が言いたかったのは、夜中に響く靴音同様、シャワーやトイレを使った際の配管を流れる水音にも気を配れ、つまり「夜中に水を流すな」ということだったのである。シャワーはともかく、使用後のトイレの水を流さずに朝まで置いておくのはどうもねぇと難色を示す私に「何のために便器にふたが付いていると思うのか」との彼女の言葉がガツンと響いた。

音大生の友人が新しく家を探す際、楽器を奏でる時間帯について、その大家や隣近所の住人たちとくどい程確認しあっていた。もともとドイツでは、正午から午後二時ごろまでは静かにする時間帯で、子供や高齢者の昼寝をジャマすることがないよう、住宅街は本当に静かである。ひとけを感じないのと同時に、自分の生活と他人の生活を大事にしようと思う気遣いを感じるひとときでもあった。

ヨーロッパの住戸の内部。天井も壁も白一色で家具類も少ない。室内の面積は日本と変わらないが広く感じる。物を少なくし、シンプルに住むのがヨーロッパの住まい方

気配りで得る快適

厳しいことばかりではない。女性二人で暮らしていると、高窓のガラスをふくことや、重い荷物を運ぶのを同じアパートに住む住人が手伝ってくれたり、お年寄りが窓辺に飾る草花の苗を配りながら、手入れの方法まで詳しく教えてくれたこともあった。

私の住むアパートでは、クリスマスイブの夜、階段に面した出入口のドアをすべて開け放し、友人や住人を招くことが常となっていた。私は一階から五階まで一軒一軒〝メリークリスマス〟と言って訪れ、お酒と食事、そして会話と音楽を楽しみ五階の自分の部屋にたどり着いたのは深夜遅くであった。

古い建物でも快適に美しく住もうと窓ガラスをふき、あちこちの窓辺がレースや草花で飾られている。窓辺に色画用紙でツルを折ってつり下げておいたら、それを見た近所の婦人が子供に作ってほしいと訪ねてきたこともあった。

周囲に目を配り、気遣って住むことは堅苦しいばかりではないと思う。住環境は個人財産や領域の問題だと片付けられがちだが、同じ建物、地域に住む者同士が権利ばかりを主張せず、少しばかり遠慮や心配りをすることで美しくそして楽しく住めるものではないだろうか。今いる場所で、家族や隣近所、地域のメンバー、そして建物と共に、いかに快適に住めるか、「住むマナー」を皆が考える時ではないだろうか。

（住まい方アドバイザー）